

# 春の真昼

小川未明

青空文庫



のどかな、あたたかい日のことでありました。静かな道で、みみずが唄をうたっていました。

田舎のことでありますから、めったに人のくる足音もしなかったから、みみずは、安心して、自分のすきな唄をうたっていました。

「おれほど、こう長く、息のつづくうまい歌い手は、世間にそうはないだろう。」と、心のうちで自慢していました。

あたたかな春風は、そよそよと空を吹いて、野原や、田の上を渡っていました。ほんとうに、いい天気でありました。あたりのものは、みんな、みみずの鳴き声にききとれているように、だまつて、ほかに音がなかったのです。

このとき、ふいに、田の中から、コロ、コロ、と行って、かえるが鳴き出しました。

「はてな、なんの音だろう？」と、みみずは、ちよつと声を止めて、その音に耳をすましました。すぐ、あの不器量なかえるの鳴く声だとわかりましたから、

「かえるのやつめが、負けぬ気でうたい出したわい。」と、みみずは、それを気にもかけぬというふうで、ふたたび唄をうたいつづけたのであります。

かえるも、なかなかよくうたいました。水みずの中なかから頭あたまを出だして、うららかにてらす太たい陽やうを見上みあげて、思おもいきり、ほがらかな調ちやうし子しでのどを鳴ならしたのでした。

「あの日ひ蔭かげ者の陰いん気きな唄うたと、私わたしの唄うたとくらべものになるかい。お日ひさまにうかがってみても、どちらが上じやうず手てかわかることだ。」と、かえるは、ひとり言ごごをしたのでした。

けれど、お日ひさまは、もとより、どちらがうまいなどとは、いわれなかったのです。

「みみずも、かえるも、よくうたつているな。」と、目めもとにほほえんで、地ち上じやうを見下みおろしているばかりでした。

みみずは、思おもいきり息いきを長ながく引ひいて、ジイー、ジイー、といい、かえるは、太ふとく、短みじかく、コロ、コロ、といて、うたつていました。

ちやうど、そこへ、どこからか二羽わのつばめが、飛とんできて、電でん線せんにとまると、ふたりの唄うたに耳みみを傾かたむけたのです。

「ああ、なんとというやさしい唄うたの声こえだろう……。 」と、一羽わのつばめは、いいました。

「ああ、なんとという春はるの日ひにふさわしい、陽やう気きな、ほがらかな鳴なき声こえだろう……。 」と、ほかのつばめはいいました。

甲こうのつばめは、みみずの唄うたをいいといい、乙おつのつばめはかえるの鳴なき声こえをいいといいま

した。そしてこんどは、いつか、二羽のつばめが、争いはじめたのです。

「あの、コロ、コロ、いう鳴き声は、私が、ここから遠い、東の方の町を飛んでいるときに、白壁の倉のある、古い、大きな酒屋があつた。つい入つてみる気になつて、ひさしから奥へはいると、美しいお嬢さんが、琴を弾じていた。ちようど、そのとき聞いた、美妙な琴の音を思い出す。」と、乙のつばめは、かえるの鳴き声をほめました。すると、甲のつばめは、

「私は、去年の夏の日、北方の青い、青い森の中を飛んでいました。そのとき、木の枝にからんだ、つたの葉の上に止まつて、なんとという虫かしらないが、細かい、かすかな、やさしい声で唄をうたつていた、その音色を忘れることができな。いま、きこえる、あの音は、まったくそのままであります。」と、みみずの唄をほめたのでした。

どちらが、いいかわるいかといつて、二羽のつばめが、電線の上で、かまびすしく争つていたときに、その下を、この近くの村にすんでいる、くろねが通りかかりました。

「なにを、おまえたちは、そこで、やかましくいつているのだ？」といつて、ねこは、立ちどまつて、上を仰いだのです。

甲、乙のつばめは、かえるとみみずの唄から争つていることを話しました。いつになく、

くろねこは機嫌きげんがよく、のどをゴロ、ゴロならして、ふとつた足あしで、肩かたをいからしながら、二、三歩前ほまえへ大またおおに歩きあるましたが、「どれ、私わたしが、どちらがよい声こえだか、判断はんだんしてやろう。」といって、ごろりと草くさの上うへへねころびました。

二羽わのつばめは、ねこに、判断はんだんを頼たのみました。そして、もし、甲こうのつばめが負まけたら、乙おつのつばめをいいところへ案内あんないし、乙おつのつばめが負まけたら、まだ甲こうのつばめが知らない景色けしきのいいところへ甲こうをつれてゆく約束やくそくをしたのでありました。

「私わたしたちは、このあたりを一ひとまわり飛とんできますから、どうか、その間あいだに、みみずの唄うたがいいか、かえるの鳴なき声こえがいいか、よく聞きいて、判断はんだんしてくださいまし。」と、つばめは、ねこに、声こえをかけたのです。

「ニヤオン！」と、くろねこは、答こたえて、ねころびながら、自分じぶんの手足てあしをなめていました。二羽わのつばめは、大空おおぞらをおもしろそうに飛とんでゆきました。道みちばたでは、あいかわらず、みみずが、ジーイ、ジーイ、と唄うたをうたい、田たの中なかでは、かえるが、根気こんきよく、お日ひさまを見上みあげながら、コロ、コロ、コロ、と喋なって鳴ないていたのです。

つばめは、そのあたりを一ひとまわりして、もどつてきますと、ねこは、いびきをかいて、

グウグウ眠り入っていました。

二羽のつばめは、いくら起こそうとして、電線の上から叫びましたけれど、ねこは、目をさましませんでした。

そのとき、一ぴきのとんぼが、ここへ飛んできました。とんぼは、広い世界へ生まれ出でてから、まだ間がありません。うすい絹のように輝きのある羽をひらめかしていました。

「なにをそんなに騒いでいなさるのですか？」と、とんぼは、いいました。

つばめは、ねこを起こそうとしていることを告げました。

「私が、起こしてあげましょう……。」と、とんぼはいった。

「ねこをですか？ あなたが……。」

小さな、とんぼを見ながら、つばめは、目を丸くみはったのです。

「私は、身が軽く、すばしこいから、だいじょうぶ、ねこになど捕らえられるようなことはありません。」と、とんぼは答えました。

とんぼは、下へ降りてゆきました。そして、ねこの頭の上へとまろうとして、やめて、大胆に、鼻の先へとまったのです。猫は、びっくりして、目をさますと、とんぼが、鼻の上にとまっているので、生意気な、おれをばかにしているなど、火のように怒り、ひと

つかみにしようとしたが、とんぼは、ひよいと飛びたつたので、くろねこは、おどり上がってとんぼを捕らえようとした。もうすこしで、とんぼは捕らえられるところを危うく逃げてしまいました。その拍子に、ねこは、田の中へ落ちました。これを電線の上で見つけたつばめは、どんなに小さな胸をとどろかせたことでしょう。かえるは、水の中にもぐり込み、みみずは、だまってしまいました。ただ、うらかな春の太陽だけが、静かな空に、にこやかに笑っていました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集 4」丸善

1930（昭和5）年7月

※表題は底本では、「春《はる》の真昼《まひる》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2018年3月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 春の真昼

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>